



さとのかぜ

No.178号

千葉県いすみ環境と文化のさと

2012年1月1日発行

編集・発行 千葉県いすみ環境と文化のさとセンター

指定管理者 (財) 千葉県環境財団

〒298-0111 千葉県いすみ市万木 2050 番地

TEL 0470-86-5251 FAX 0470-86-5252

URL <http://www.isumi-sato.com/>



初
春

あけましておめでとうございます。

今年も 千葉県いすみ環境と文化のさと をよろしくお願ひいたします。

2012年の干支は「辰」(たつ)です。辰は、日本では「龍(りゅう)」にも置き換えられます。龍は中国を起源とする想像上の生きもので、めでたい聖獣として尊ばれ、つのを持ちよく雲を起し雨を呼ぶとされています。豊作への願ひも込められているように感じます。

昨年登場したセンター展示のキョンにも「つ」があり、りりしい顔をしています。もともとの生息地は中国南部や台湾ですが、いすみ周辺でも増えてきてしまっている外来種です。

センターの畑(初夏植付野菜その後～冬野菜植付まで)

前号で生長途中であったサツマイモと赤ジソは、イベント用の材料として役立ってくれました。

サツマイモは9月下旬に行った“いも掘り・焼きいもにチャレンジ”イベントに使いました。掘ったイモを新聞紙で包み、その上をアルミ箔で包み、籾殻くんたんの中に埋め込み約1～1.5時間焼きました。ほくほくした美味しい焼イモができ、大人も子供も大喜びでした。掘ったイモは、おみやげとして持ち帰っていただきました。



赤ジソは、10月初めの“草木染”イベントに使用しました。今回が初めての栽培で発芽させるのに苦労しましたが、何とかイベントにまにあいました。タマネギの皮、セイダカアワダチソウ、赤ジソの3種の染液で染め上げた布は、それぞれの特徴が出て見ごたえがありました。



染色作業

春に植付した野菜も旬を過ぎたので、冬野菜の植付をしました。品種は昨年とほぼ同じですが、9月下旬に発芽したサヤエンドウ・ダイコン・そら豆・人参・カブ等は、10月の台風による大雨で根が洗われ、種が地表にむき出しになったり流されたりしてしまいました。やむをえず種の蒔き直しや植え直しをしました。その後は順調に成長しています。



今回は、ただ畑を見てもつまらないだろうと思い、収穫体験が出来るようナバナとそら豆を多く植えました。そら豆は畑の土手にも植えました。この地域の農家では道路の土手や畑の土手によく植えてあります。畑がなくても家の前に道路の土手があれば、そこで育てられます、試してみてください。但し、そら豆は、おはぐろ(豆の黒い部分)を下にして植えないと発芽しませんから要注意です。



畑のそら豆



土手のそら豆

収穫体験が出来る時期になったらブログでお知らせします。ぜひ、おいで下さい。お待ちしております。

センターにおける行事や講座について

千葉県いすみ環境と文化のさは「身近な自然の大切さやおもしろさを学び、地域の歴史や文化にふれあうことで、自然環境を大切に守っていかう」という考え方を広く伝えるために設置されました。全国には、山梨県八ヶ岳、鹿児島県屋久島、秋田県五城目町にも類似の施設が設置されています。

当センターは、いすみ市万木のセンターを中

心として、小動物の広場、ふるさとの森、万木の丘、トンボ沼、ホテルの里、照葉樹の森、昆虫広場の七つのスポットゾーンを指定し、展開しております。センターでは毎年度各種の行事や講座を開催し、内容は自然環境に関するもの、この地方の里山文化に関するものが中心です。本年度は次のようなものが計画され実施中です。

実施時期	行事名	内容
4月	タンポポや小川のいきものを観察	春の身近ないきものや草花の観察。
	万木城の歴史と里山の自然観察	万木城の歴史の学習と城跡周辺の自然観察。
5月	米作り1・田植え体験	センターの田んぼに自分の手で苗を植える。稲作作りの体験。
	山田の穴堰と旧家の歴史を訪ねる小さな旅	穴堰と鍾乳石、旧家の歴史、郷土資料館を訪ねる。
	太東の岬で海辺の自然観察	太東崎の海岸、地形、地質、植物などの観察。
6月	岩船で磯のいきもの観察	磯にはどんな生き物がいるか実際に採取して観察。
	ホテルの里でホテル観察	ゲンジボタルの集団発光を、山田ホテルの里で観察。
	センター内でのホテル観察	センター内の小川でのゲンジボタル観察。
7月	ハス観賞週間	センターのハス田で大賀ハスを中心としたハスの花の観賞。
	海辺の植物観察	日本で最初に指定された天然記念物「太東海浜植物群落」の観察
	夏の星座観察	センター内で夏の大三角形、土星など夏の夜空の星座観察
8月	ミニプログラム・スペシャルウィークさとの夏遊び	虫取り、魚とり、竹トンボ作り、水鉄砲作り、竹馬など夏の遊び体験。
	トンボの沼のトンボ観察	スポット地区であるトンボの沼でトンボを捕獲し観察。
9月	米作り2・稲刈り体験	5月に田植を行った田んぼで稲刈りや昔の脱穀の体験。
	いも掘り・焼いもチャレンジ	センターの畑でいも掘りと焼いもの体験
10月	草木染め体験	自分でデザインし、草花を利用したシルクなど布への染色体験。
	竹かご教室（入門編）	竹取り、ひご作りから始めてザルなどを作る4日間。
11月	竹かご教室（応用編）	竹かごのいろいろな作り方を学ぶ2日間。
	第14回さとの文化祭	小学生からは絵画、工作や自由研究作品、一般からは工芸品、俳画などの作品を展示。1週間開催。
12月	米作り3・わら細工を作ろう	収穫後の稲わらを使って、昔ながらのわら細工を作る。今回は鍋敷き。
	つるでリースを作ろう	山に入りつるなどを採取し、リースを作る。
	米作り4・もちつきをしよう	収穫したモチ米を使用し、もちつきを体験。
	米作り5・おかざりを作ろう	収穫後の稲わらを使って、鳥居形の正月のお飾りを作る。
	米作り6・おかざりを作ろう	収穫後の稲わらを使って、輪形の正月のお飾りを作る。
1月	そば打ち体験	そばを自分で打ち食する。
	冬の星座観察	オリオン星団など冬の夜空の星座を観察。
	つるでかごを作ろう	材料を自ら採取し、かごを作る。
2月	水辺の鳥の観察	水辺にはどんな鳥がいるか、夷隅川河口周辺で観察。

	椿の里を見よう	大原の椿の生垣と椿公園の散策。
3月	トウキョウサンショウオの卵のうを見つけよう	センター周辺でトウキョウサンショウオ卵のうを探し観察。
	花炭を作ろう	マツボックリ、ハスなどいろいろな材料を使用し、花炭焼きを行う。
	早春の草花、小さな世界を自然観察	ルーペを使用し、早春の植物の小さな世界を観察。

また各種団体、学校関係及び利用者の要望に応じた施設見学、自然観察(水辺の生き物観察、ホテル観察など)、環境学習支援、紙すき体験、縄織り体験、竹トンボ作り、地層の学習、わら草履作り、などの観察会や講座などを実施しております。以上の他、いすみ楊枝教室といすみフォトクラブ四季彩写真展は定期的で開催されてお

ます。日常的にはディキャンプ場、和室や工作室、研修室をはじめとする各種の貸し出しをしております。

平成 24 年度の各種行事計画も本年度を反省材料としてよりよいものを計画したいと考えております。多くの方々のご利用を心からお待ちしております。

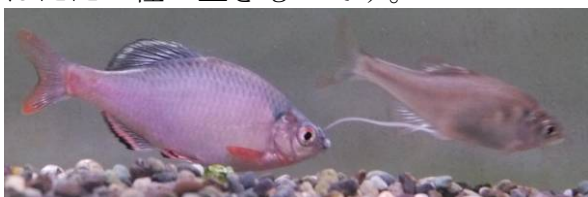
■ 夷隅川流域よもやま話—その 7・絶滅危惧と多様性—

夷隅川には 72 種もの魚種が生息するため、日本では長良川に次いで第二位と言われており(参考さとのかぜ No147,176)、その流域のいすみ地域は自然が豊かで、いろいろな種類の生きものが数多く生息しています。

最近よく「絶滅危惧種」とか、「レッドデータブック」、「生物多様性」などという言葉を目にした方は多いと思います。今号は、それらを話題にします。

・絶滅のおそれのある野生生物

当センターでも「ミヤコタナゴ」を許可のもとに飼育展示していますが、昭和の 40 年代頃まで里山の水路などでよく見かけたというこのタナゴは、国指定天然記念物(文化財保護法 1950・文部科学省)に指定されており、同時に国内希少野生動植物種(絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律 1992・環境省)としても指定されています。国内希少野生動植物種としてミヤコタナゴは、関東地方ではただ一種の生きものです。



ちなみに違反者は、文化財保護法では、5 年以下の懲役若しくは禁固又は 30 万円以下の罰金 / 種の保存法では、1 年以下の懲役若しくは禁固又は 100 万円以下の罰金です。

レッドデータブックとは絶滅のおそれのある野生生物の情報をまとめた本です。

国際自然保護連合 (IUCN) という団体が 1966 年に初めて発行し、そのタイトルがレッドデータブック (RED DATA BOOK) であり、最も危機的なランクに選ばれた生物の解説が赤い用紙に印刷されていたといひます。「種の生存が危機的な状況にある生きものの本」というように理解してよいでしょう。

日本では、1991 年に『日本の絶滅のおそれのある野生生物』というタイトルで環境庁(現在の環境省)がレッドデータブックを作成しました。

各都道府県でも、それぞれ独自に作製、公表されて順次改訂版が発行されています。千葉県では、1998 年に「千葉県レッドデータブック 植物編」が、1999 年に「同 動物編」が初めて発行され、2000 年に両編をコンパクトにわかりやすくした「普及版」が発行されました。その後漸次改訂が行われて平成 24 年 1 月現在、「植物・菌類編」では 2009 年改訂版が、「動物編」では 2011 年改訂版が新しいものです。その内容は、「種(あるいは、亜種、変種)ごとに生物学的観点に基づくデータから絶滅の危険性を評価し、保護の視点を加味したランクを付け、形態や性質などの特徴、生息・生育状況、分布、保護対策などが記述されている」とブックに記述されています。

絶滅の危険性の評価については、IUCN、国、各県では微妙に異なっています。千葉県のレッドデータブックからそのカテゴリー区分の対応相違をまとめた表を下に掲げます。

表1. レッドデータカテゴリーの対応

IUCN国際自然保護連合 (2003)	環境省RL (2007)	千葉県RDB (2009,2011)
Extinct(EX)	絶滅 (EX)	消息不明・絶滅生物 (X)
Extinct in the Wild(EW)	野生絶滅 (EW)	野生絶滅生物 (EW)
Critically Endangered(CR)	絶滅危惧 I A類 (CR)	最重要保護生物 (A)
Endangered(EN)	絶滅危惧 I B類 (EN)	重要保護生物 (B)
Vulnerable(VU)	絶滅危惧 II類 (VU)	要保護生物 (C)
Near Threatened(NT)	準絶滅危惧 (NT)	一般保護生物 (D)
Data Deficient(DD)	情報不足 (DD)	-
	絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)	-
		保護参考雑種 (RH)

国の区分では「絶滅危惧 I」「絶滅危惧 II」、千葉県の区分では「最重要保護生物」「重要保護生物」「要保護生物」「一般保護生物」という呼び方になりますね。

地球上のひとつひとつの「種 (しゅ)」は、長い進化の結果として生み出されたものです。ある種が絶滅してしまえば、それを人間の手で蘇らせることはできません。そしてそれぞれの種は、お互いに相互のつながりを持って生活し環境を作り出しています。

・外来種問題

ここ数年、公園に捨てられたカミツキガメや野生化したアライグマ、やや古くはブルーギル、セイヨウタンポポなどがニュースとして話題になりました。これら外来生物の移入により、在来種が圧迫されたり、交雑して遺伝子のかく乱が生じるなど、その影響により地域本来の自然が乱されることが心配されています。有害外来生物の目録を「ブルーリスト」と呼ぶことがあるようです。

忘れてならないのは人間は昔から、作物・家畜などその地域本来にはないものを持ち込みたくさん利用して豊かな生活をつくってきたということです。現在では、有用か有害かが大きな分かれ目になっています。

・生物多様性の確保

地球上の生きもの、すなわちいろいろな種がさまざまな環境と結びついて、生態系をつくり出しています。こうした種や生態系などの多様さ(違ったものがいろいろあること)を生物多様性といいます。英語では、Biodiversity(バイオダイバーシティ)といいます。

生物多様性を生み出すそれぞれの種は、おのおの固有の役割をもち、ひとつの種は他の種とつながりを保ちながら生きています。私たちが暮らす環境の基盤は、こうした種と種の複雑で微妙なバランスのうえに成り立っています。熱帯多雨林の生態は、こうしたモデルの研究対象やイメージとして有名ですね。

生物や生息環境が健全な状態で保全されていることを「生物多様性の確保」とか、「生物多様性の保全」といいます。英語では、Conservation of Biodiversity といいます。法律では、生物多様性条約(1993年発効)を受けた環境基本法(1993)第14条の中で初めて使われた言葉です。最近よく耳にする「絶滅危惧」とか「レッドデータ」という言葉は、「生物多様性の確保」というはっきりした概念に結び付いていったと考えてよいでしょう。

千葉県のRDB巻頭「はじめに」には、将来に向けて以下の一文がありました。『地域の自然の保全には、レッドデータとブルーデータのほかに、現状は健康に見える生物の「グリーンデータ」が調べられるべきでしょう』一。レッド、ブルー、グリーンというわけですね。

[参考]千葉県レッドデータブック植物編/動物編
生物多様性センターWebサイト www.biodic.go.jp/

あなたのお名前は? ~名付けの由来を探求~

寒い日が続いています。外に散歩に出かけるのはちょっと…と、家に籠りがちになっている人もいるのではないのでしょうか。そんな時は、まず家の中で植物とふれあってみませんか。

家の中でぬくぬくしながら、いつもと違った観点から植物とふれあう方法として、植物の名前を

調べてみます。自然観察会では名前ばかりにこだわらないことと、言っていますが、名前にはそれぞれ面白い物語があるのです。



今回の例は、カラスウリとスズメウリです。昨年は例年に比べ、センター周辺ではスズメウリがよく目立ちました。このスズメウリ、響から考えると「雀瓜」になるのでしょうか。小さな灰褐色の果実をつけます。大型で赤い果実をつける「カラスウリ」より、小さい果実なので、「スズメ」と名がついたという説があります。ところが、この「説」というのは曲者で、由来が幾つかあるものもあります。スズメウリのもう一つの説は、未成熟の時は黄緑色の果実が熟すと白くなるので、スズメの卵に似ているからだというものです。

スズメの卵は、直径約2cmの、灰白色や淡青色などの地に灰青色、灰褐色などの微小班があります。つまり、個体差は多いようですが、くすんだ白地に、ブチ模様という姿が基本のようです。そこから考えると、「スズメの卵説」は当てはまらないと思う人も多いようです。



この「説」はいつ誰が名付けたのか、はっきり分かっていないものもあり、図鑑に記載される名付けの由来はさまざまです。センターにある植物図鑑にも、スズメウリに関して両方の説が記載されたものが数冊あります。(例えば、牧野新日本植物図鑑、野の草花図鑑3)

ここでどちらの説が有力か…と考えていると、なぜカラスウリは「カラス」なのだろうという疑問が湧いてきます。カラスウリの名前の由来は「カラスが好んで食べる(大言海)」や「樹上に永く果実が赤く残るのをカラスが残したのでであろうと見立てた(牧野新日本植物図鑑)」などがあります。前記の説は、カラスの食性から好んで食べるようには思えません。後記の説は実に風流ですが、これではカラスである必要がありません。



スズメウリ、カラスウリのように植物名の中には、動物の名が使われているものも多くあります。その由来は動物名を冠したものは、人にとって(美味しく)食べられないものであることが多いそうです。そのため、「意味なんてない。人が食べられ

ないから動物名をつけた」という説を押す人もいます。しかし、この説もカラスウリが「カラス」である理由がしっくりときません。

そんなことを考えていたところ、新たな説に出会いました。中村浩著「植物名の由来」という書籍の中に、「カラスウリは烏瓜ではなく、唐朱瓜である」と記載されているのです。唐朱(からす)とは、古く唐から伝来した赤い墨「朱墨(しゅずみ)」のことです。丹砂(たんさ)というものから精製され、原鉱は朱赤色をし、大きいものは鶏卵大、小さなものはザクロの種子状であると記されています。中村氏はこのことから、カラスウリは鳥のカラスでは無く、唐から輸入された卵形の朱の原鉱に類似していることにちなんだ名であるという説を唱えています。

そして、同じくスズメウリについても他とは違う説を唱えていました。それは、「スズメウリは雀瓜ではなく鈴女瓜だ」といった説です。スズメウリの果実は、ツルから無数に垂れさがります。それを観察した著者は、まさに“鈴生子”にぶら下がった果実を鈴に見立て、かわいらしいという意味で使われる「女(め)」をあてて、「スズメウリ」と名付けられたのではないかという説を唱えています。確かに、意識して観察すると、鈴のように見えてきます。

このように、本を開けば名前の由来はさまざまで、どれが真実であるかはっきりしないものもあります。しかし、それぞれの由来に物語があり、それを追うだけでもさまざまな出会い、発見があります。

そして、書籍で植物とふれあったら、実際の姿が見たくなるのではないのでしょうか。自分の納得できる由来を見つけに行くぞ！と、外に出れば書籍で知った以上の発見があるかもしれません。

植物の名前だけ覚えることは、つまらないことかもしれません。しかし、名前を知るということは親しみを持つ第一歩でもあります。機械的に暗記するのではなく、親しむためにその植物に隠された物語を探してみたいはいかがでしょうか。

まだまだ寒い日が続きますが、遠くに行かなくても



足元からできる自然観察、出かけてみませんか。

地球環境問題のいろいろ ⑨～異常気象～

昨年 12 月の気候変動枠組条約 COP17/CMP7 は、なんとか決裂せずに閉会したようですが、新たな枠組みはどうなるのでしょうか。地球温暖化問題も目の離せない新しい年が始まりました。

世界気象機関 (WMO) では今年の極端な気象現象をいくつも紹介しています。例えば

- ロシア北部では、春の平均気温が平年よりも 9℃も高くなったところがある
- フィンランド、アメリカ、中央アメリカ、スペインでは記録的な猛暑
- 東南アジア、ブラジル、オーストラリア、アフリカ南部、中央アメリカ、パキスタンでも深刻な洪水被害が発生

など、など。エルニーニョやラニーニャが直接の引き金のようなのですが。

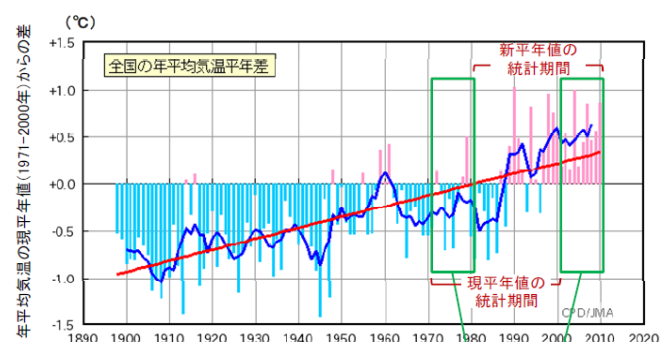
このような気象現象から、昨今は「異常気象」という言葉をよく耳にします。この「異常気象」という言葉は、「平均的状态から大きく偏った状態」という意味では誰も同じように使っていますが、使う人により微妙に意味が異なっています。

日本の気象庁では異常気象レポートを 5 年おきにを出しており、2005 年版で異常気象を「全国約 130 の各気象官署の月平均気温、月降水量、月間日照時間が、おおよそ 30 年に 1 回の出現頻度に対応する基準を超えた場合をいう」としています。WMO では「25 年以上に 1 回しか起こらない程度の大きさの現象」としていますし、温暖化の話でよく出てくる IPCC では Extreme weather event (極端な気象現象) という言葉の定義を「特定の地域における統計的標準値分布の中で稀 (10%以下あるいは 90%以上) な現象」としています。

でも、私たちが日ごろ目にし、耳から聞くのはマスコミを通して、ということになります。先の定義のほかにも、確率とは無関係に「過去に経験したこともないような、経済的に大きな被害を出した気象あるいは気候現象」のニュース時に、と感じています。マスコミと科学者では、解説時に言葉の意味が微妙に違うことはよくあることですから。

過去の気象データとの比較をする場合、気象庁はちょっと前まで 1971～2000 年の期間で

平年値を算出していましたが、昨年 5 月からは 1981～2010 年の値を用いて平年値を算出比較に使っています。温暖化してきたと言われてきた期間が平年値の算出に組み込まれたのですから、新平年値は前の平年値よりも全国的に +0.2～0.4℃程度高くなっています。そこで、昨年のニュースで聞いていた「平年並み」が、実は昔に比べればちょっと暖かであった、ということになっていました。



この差が平年値の差となって現れた

「稀」の 10%が 25 年や 30 年に 1 回生じるのか、あるいは被害が甚大なのかはともかくとして、いわゆる地球温暖化の進行に伴う気候変動では、この異常気象 (極端現象) が増えると言われていています。そのため IPCC では昨年、「気候変動への適応を進めるために極端な現象と災害のリスク管理に関する特別報告書」を出しました。そのなかで、つぎのようなことを例示しています。

- 農業：ロシアは干ばつで穀物輸出の規制 (2010)
- エネルギー：熱波がフランスの発電を脅かす (2003)
- 水：Lake Mead (米国の最も広い貯水池) は記録的な低水位 (2010) など。

昨年のタイ洪水が日本経済に大きな影響をおよぼしたのは記憶に新しいところです。経済と環境が密接に絡み付いています。さて、今年はどうなるのでしょうか。

[参考]

1. WMO(2011) Press releases No.935
2. 気象庁 異常気象レポート 2005 年版
3. 気象庁 報道発表資料 平成 23 年 3 月 30 日
4. IPCC(2011)The IPCC Special Report on Managing the Risks of Extreme Events and Disasters to Advance Climate Change Adaptation

センター周辺の淡水エビ

今号では、センター地区から南東方向に約1.5 kmに位置する夷隅川支川の江場土川上流部の淡水エビについて紹介します。

今回紹介する江場土川と前号とりあげたセンター地区内の水路は、標高 50~60m程度の同一丘陵地を水源域としていますが、分水嶺で分断された隣り合わせの関係にあります。センター地区内水路は当該丘陵の北側斜面を集水域とし、夷隅川本川に直接流入しています。一方、この反対側に当たる江場土川水系上流部は南斜面を集水域とし、少なくとも明治の頃から開発等の影響を受けることもなく今日に続くのどかな水田地帯を流下し、夷隅川本川河口部の右岸へ流入しています。



流域位置図

今回紹介する個所は、江場土川の最上流部にあたる岬ダム北側に隣接した沢の小水路に位置し、スジエビ、テナガエビ、ヌマエビ、トゲナシヌマエビ、ヤマトヌマエビの5種が確認されました。このうち、トゲナシヌマエビとヤマトヌマエビの2種はセンター内水路には生息していないものでした。

表 エビと環境

種名	外見等の特徴	生息個所の状況
トゲナシヌマエビ (両側回遊性) 県: 最重要保護生物	<ul style="list-style-type: none"> ● ツノ(額角)が短い ● ツノのギザギザがない ● 眼が小さい(退化したように) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 河口より4~5キロ圏の水路 ● 凹凸(隠れ場所)の多い自然水路 ● 木々に覆われた昼でも暗い水路
ヤマトヌマエビ (両側回遊性) 県: 要保護生物	<ul style="list-style-type: none"> ● エビ腰ではなく腰が緩やか ● 線状に連なる点状斑がある ● 採捕時跳ねるより歩きまわる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 絞り水が滴る程度の河川最上流部 ● 植生が多様な沢奥の小水路

この2種のエビについて、これまでの観察

結果をもとに整理すると表のようなことが言えます。



千葉県レッドデータブック(2011年改訂版)では、トゲナシヌマエビ(最重要保護動物)の成体の生息環境は河川河口近くとされているため、江場土川最上流部は一般的な生息環境とは言えません。今回、江場土川最上流部でトゲナシヌマエビの成体を多く確認したことから、その分布をさらに調べるため、夷隅川全体でエビ類の調査を続けてみたいと思います。なお、この2種のエビは、河川で孵化した幼生が海へ下り、成長・変態を経たのち幼体が河川を遡上する**両側回遊性**です。これらが江場土川最上流部で確認されたことから、より良い生息環境を求めてエビ達は長い旅をしてきたこととなります。



ヌマエビの仲間は農薬などによる水質汚染に弱いので、それが生息している環境は昔ながらの自然が残っているといわれます。江場土川は、これらエビ達の生存に必要なとされる環境要件を有する数少ない河川の一つになっていると言えるでしょう。この河川環境は、エビ達にとって辛うじて残された安住の地であり、人にとっての里地環境としても貴重な場所だと言うことができます。私たちもこうした生き物たちのおかれた状況をしっかり把握することで、自然の在り様や自然の質的な変化を見落とすことのないようにして、適切な対応を考えていきたいものです。

[参考]・流域図は、農業技術研究所作成の「歴史的農業景観閲覧システム」に加筆

《 行事報告 》

10月8日

草木染め体験



大人 13 名の参加がありました。今回染料としたのは、タマネギの皮とセンターで育てた赤シソでした。

洗ったタマネギの皮と赤シソは細かくきざみ、デイキャンプ場で大鍋を使って煮出しました。ビー玉や割り箸、輪ゴムを使って木綿と絹の布に模様をつけ、染料の中に浸しました。定着にはミョウバンを使用したアルミ媒染と、木酢酸鉄を使用した鉄媒染を行いました。

アルミ媒染は明るめな色、鉄媒染は暗めな色と、違いがはっきり分かれ、皆さん自然の色を楽しみました。

12月4日

米作り3 わら細工を作ろう



大人 6 名の参加がありました。今回の細工物は、わらを使った昔ながらの鍋敷きを作りました。

わら細工には、お飾り用にセンター水田で栽培している「京都神力」という、丈の長いわらを使います。参加者自らわらすぐり(ハカマと呼ばれる下葉を取る作業)、ワラ打ちをし、わらを柔らかくします。芯はわらを輪に束ねた物を使用しました。輪の周囲に、わらの根元部分を隙間なく編んでいけば完成です。

初心者でも簡単に作成できたと、好評でした。

12月10日

つるでリースを作ろう



大人 13 名の参加がありました。初霜&初氷を観測した日で、朝のうちはどうなることかと思いましたが、開始時刻の10時には快晴のポカポカ陽気になりました。

センター周辺でつると、飾りになる木の実や葉を採集しました。センリョウやナンテン、センダンの実が人気のようでした。

今回はつるを使ったリースの他に、わらの鍋敷きを使ったお正月用のリースも作製しました。わらを使うとぐっとお正月らしくなり、クリスマスからお正月までの飾りができたと好評でした。

12月17日

米作り4 もちつきをしよう



大人 23 名、小人 9 名の計 32 名の参加がありました。快晴のもちつき日和のなか行事が開催できました。

お供え用の丸餅と、切り餅、昼食用のおもちを、1臼1升(1.5kg)16 臼つきました。昼食用のお味噌汁とからみ餅に使う大根は、みんなで畑まで収穫にいきました。

もちつき経験者は 1/3 程度で、多くの方は初めて杵を持ったようです。経験者から、正しい杵の降ろし方を習いながらの作業となりました。今年も美味しいおもちと、お味噌汁を食べることができました。

☆行事内容やセンターの日常を、センター日誌 (<http://isumisato.exblog.jp/>) にてご覧いただけます。

竹かご教室 入門編—10月29、30、11月3、5日—

例年大人気の竹かご教室ですが、本年は入門編と応用編に分かれておこなわれました。

入門編は全4回の日程で、山に竹を伐りに行くところから始まります。竹の伐り方、かご作りに向けた竹の選び方を現地で解説を受けて、一人二本程竹を伐り運び出しました。

センターに戻り、竹を洗った後はひたすら竹ひご作りの練習です。今回は入門編とあって、ほとんどの方が竹かご作り初体験です。なかなか思うようにひご作りができなかったようです。

2日目も竹ひご作りの練習がメインでしたが、編み始める分のひごができあがった人も現れ、編み方の講習も行われました。3日目になりますと、そろそろ皆さん編む作業に入りました。4日

間で竹ひご作りから編むまでを完成させるため皆さん真剣です。

最終日には皆さん1つはかごを完成させることができました。「去年は完成までに至らなかったが今年は完成できた」といった、2年参加して技術が身についた方もいたようです。



竹かご教室 応用編—11月26、27日—

全2回で開催された、竹かご教室応用編は、参加対象「長い竹ひご作りができる人」となっ



ただけであり、1日目の開始前から竹談義に夢中でした。

さまざまな竹かごの写真や

実物を見ながら、皆さんで「これが作りたい」「ここが難しい」などなど大変盛り上がっていました。竹を自分の竹山から伐り出して持ってきた方も数名おり、熱の入れ方がやはり違うなど、スタッフも感心しきりでした。

皆さん1日目からさくさく竹ひごを作り、編み始めた方おられました。2日目にも順調に進み、背負いかごや網代網のかごといった、いつもの竹かご教室ではあまり見かけないかごの数々が完成しました。

第15回さとの文化祭

第15回さとの文化祭を11月15日～23日開催いたしました。

文化祭に出展される主な作品は、夷隅郡市の小学校からのものです。今年は23校から、絵画・工作・自由研究の3部門446作品の出展がありました。今年も独創的な絵画や、しっかり作り込まれた工作、自由研究が並びました。

他にも、一般部門では地元で活動する「いすみ楊枝」の楊枝や竹細工、「岬町俳画クラブ」から俳画の出展がありました。

期間中は1000人を越える方の来館がありました。子ども達の作品の独創的な筆づかいや色づかいに、皆さん驚いていました。また、文化祭を通して初めてセンターの存在を知った方も多

く、改めてまた遊びに来たいといった声もありました。

来年以降も続けて開催する予定ですので、今年観賞に来られなかった方は、ぜひ来年観賞にいらして下さい。



これからの行事案内

1月 (11月2日より受付開始)

●そばうち体験

15日(日) 10:00~14:00 定員 18名

そばを自分で打って、皆で味わいましょう。

対象：中学生以上

▲参加費：1000円

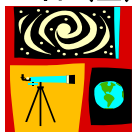
持物：ボウル(約30cm)、割烹着、
手ぬぐい、タオル、寒くない服装

場所：千葉県いすみ環境と文化のさとセンター
集合後、別会場に移動



●冬の星座観察

21日(土) 17:30~19:00 定員 20名



オリオン星団など冬の夜空の星座観察をしましょう。

持物：寒くない服装、観察用具

●つるでかごを作ろう

29日(日) 10:00~16:00 定員 20名

つるを使ってカゴ作りをします。

山に入ってつるも取りに行きます!

対象：中学生以上

持物：鎌、剪定バサミ、軍手、長靴、
山に入れる服装、弁当、雨具



2月 (12月1日より受付開始)

●水辺の鳥の観察

11日(土) 8:30~11:30 定員 20名 雨天中止

水辺にはどんな鳥がいるでしょう?

観察に行きましょう。



場所：夷隅川河口周辺 (集合はセンター)

持物：寒くない服装、観察用具

●米作り6・わらでぞうりを作ろう

12日(日) 10:00~16:00 定員 20名

世界に一足しかない自分だけのわら草履を作りましょう。



持物：植木バサミ、弁当、座布団
寒くない服装

●椿の里を見てみよう

26日(日) 9:30~12:00 定員 20名 雨天中止

椿の里はどんな風に生垣が続くのでしょうか?

場所：大原旧市街地周辺
(集合はセンター)

持物：寒くない服装



3月 (1月4日より受付開始)

●トウキョウサンショウウオの卵のうを見つけよう

3日(土) 10:00~12:00 定員 20名 雨天4日

センター周辺のトウキョウサンショウウオの卵のうを探し観察します。

持物：長靴、寒くない服装



●花炭を作ろう

10日(土) 9:30~12:30 定員 20名 雨天11日

いろいろなものを使って「花炭焼き」に挑戦しましょう。

持物：花炭材料(マツボックリなど)
軍手、うちわ、ふた付空缶箱



●早春の草花、小さな世界を自然観察

24日(土) 10:00~11:30 定員 20名 雨天25日

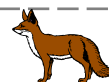
ルーペを持って早春の植物の小さな世界を観察しましょう。

持物：寒くない服装



資料の入手先のご紹介

- 千葉県の保護上重要な野生生物
ーレッドデータブックー動物編(2011年改訂版)
ーレッドデータブックー植物・菌類編(2009年改訂版)



上記図書は動物編が1冊1,530円(送料別)、植物・菌類編が1冊2,450円(送料別)で入手できます。購入先は千葉県文書館1階行政資料販売コーナーとなっています。

また千葉県生物多様性センターのWEBページからPDF版がダウンロードできます。

- 日本のレッドデータブック
国のレッドデータブックは財団法人自然環境研究センターにて販売しています。哺乳類から始まり植物(維管束植物以外)までの全部で9冊からなり、1冊2,100円から4,410円(送料別)。また、内容の検索は環境省がWEBで生物多様性情報システムとして公開しています。



- 世界のレッドリスト
一般的にはIUCN(国際自然保護連合)のWEBサイトで検索ができます。



<http://www.iucnredlist.org/>
英語です。データベースなので検索方法は日本支部のWEBサイトを参考にしてください。
<http://www.iucn.jp/species/redlist/redlisthowto.html>

- 千葉県の情報
千葉県環境生活部自然保護課
生物多様性戦略推進室生物多様性センター



センターの生き物たち



カシラダカ/ホオジロ科

冬鳥として渡来し、群れで活動します。地上を跳ね歩いて草の実を探します。大きさはスズメ大です。頭部の羽毛が長く、冠羽を立てるのが和名の由来です。

センター周辺では冬、湿性生態園に続く林道沿いのヤブから細く「チッ、チッ」という地鳴きの声が聞こえます。群れで鳴きながら木々を移るので、身体はそれほど大きな鳥ではありませんが、その現場に居合わせるととても賑やかです。毎日必ずとはいきませんが、タイミングが合えば、カシラダカの動く姿に会えますのでぜひご来館下さい。



ヤブツバキ/ツバキ科

ヤブツバキは本州、四国、九州、沖縄に分布する常緑高木。海沿いに多く、山地にも自生し、庭木や防風林、防潮林としても多く植栽されています。種子からとれる油は、食用のほか、化粧品、薬品などの原料になります。

花期は11～12月、または2月～4月と冬に咲きます。花が少なく、枯れ葉も多い時期に紅色の花を咲かせるので、たいそう目立ちます。センターでも数本植栽されていますが、チャドクガが大発生する点だけは難ありです。

いすみ楊枝 —千葉県伝統工芸品—

センターでは、「いすみ楊枝」を県内外に広く紹介するため、毎月高木守人氏に実演をお願いしています。

日時 毎月第3日曜日(9:30～16:00)

場所 ネイチャーセンター

講師 高木守人氏

参加料 材料費など実費いただきます

内容 楊枝・花入れ・茶杓作り など

編集後記

平成24年が始まりました。今号の発行は予定を少し遅れてしまいました。昨年12月に5回行事を入れ、その準備と後片付け、大掃除と続いたため、原稿の作成が間に合いませんでした。少数精鋭でがんばっているため、本紙の発行にしわ寄せがきたしいです。

昨年は記事にもあるように、多くの行事等を行いました。3.11 東日本大震災と引き続き原発事故による影響で、4～5月の来園者数は激減。それでも夏以降は多くの方に行事へ参加していただきました。スタッフ一同、御来園いただいた方々に感謝しております。

今年は私たちにとって3年の指定管理期間が終了する一つの節目です。さて、今年はどんな年になるのでしょうか。 所長

行事への参加申し込み、お問い合わせは、電話(0470-86-5251)、ファックス(0470-86-5252)、または、直接センター事務室にお申し出下さい。定員のあるものについては、定員になり次第締め切らせていただきます。あらかじめご了承下さい。全ての行事はネイチャーセンターに一度集合してから移動します。

*eメール可(メールアドレス:senta-sato@isumi-sato.com(すべて半角小文字です))

*行事申し込み後、都合によりキャンセルする場合は必ず早めにセンターまでご連絡下さい。

◆ ◆ ◆ 利用案内 ◆ ◆ ◆

休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌日)、12月29日～翌年1月3日

開館時間：9:00～16:30、入館料：無料

※当施設のご案内や解説などを希望される団体は、2週間前までにお申し込み下さい。